

がん

早期発見の知識編

治せるがんの多くは 早期発見できたもの

がんを治すことができた、という例が増えていますが、現在の医学の力で治せるがんの多くは、検診で早期発見できたものに限りません。がん検診の大切さをよく理解して、積極的に検診を受けようという気持ちをも、ぜひ持っていただきたいと思えます。

自分の健康は自分で守る、という自覚があつてこそ、検診もその真価を発揮することができるといえます。

女性は四十代になったら乳がん検診、子宮がん検診をスタートさせたいものです。そして、男女とも五十代になったら各種

のがん検診を受けるようにしてください。

血液検査や尿検査、血圧測定などの一般健康診断(健診)は、お住まいの地域や勤めている職場でも受けることができます。持病があつて定期的な受診をしている方は、かかりつけ医による定期的な全身のチェックも行なわれるでしょう。

健診の検査項目の異常から、がんの発見につながることもあります。採便による便潜血反応(便に血液が混じっていないか)がプラス(混じっている)であれば、大腸がんが疑われますし、肺のエックス(X)線撮影で陰影があれば、肺がんの可能性もあります。また貧血が強いときは臓器からの出血が疑われ、がんがあるのではないかと、というシグナルとなります。

しかし、健診だけではがんの早期発見はできません。がんに的を射はつた検診を受けることが、がんの早期発見には欠かせません。

特に、両親や家族にがんの方がいる場合は、たとえば大腸がんであれば、その検診を欠かさず受けるようにするなとすれば、安心度が増すでしょう。

胃がん検診、肺がん検診、乳がん検診、子宮がん検診などは、地域や職場で取り組まれていることも多いですし、人間ドックでは、希望するがん検診を追加できるコースもあります。

また国立がんセンターで行なわれている検診のように、最新の検査機器を用いた、がん専門の検診コースを設けている医療機関もあります。かかりつけの医師に紹介してもらうことも役立ちます。がん検診の結果をかりつけ医のもとでもファイイルしてもらつておけば、その後の異常に適切に気づくことができます。

早期発見に役立つ いろいろな検診

それでは、患者さんの多い代表的ながん早期発見に役立つ検診を紹介しましょう。

大腸がん

先述の便潜血反応検査で、大腸がんの約三分の一が発見されます。また、直腸診(医師が肛門に指を入れて腫瘍の有無を調べる)、内視鏡検査(肛門から内視鏡を入れて腫瘍の有無、大腸粘膜の変化を調べる)なども行なわれます。内視鏡に超音波診断装置を組み込んだものもあり、大腸の内部組織の異常を調べることもできます。

国立がんセンター放射線診断部の飯沼元医師が中心になって開発が進められているパーチャルコロノスコピーという方法は、大腸を3D(スリーディメンショナル)CT(エックス線による

図表8 早期発見に役立つ検査

大腸がん

- 便潜血反応検査で約3分の1が発見される
- 直腸診（医師が肛門に指を入れて腫瘍の有無を調べる）
- 内視鏡検査（肛門から内視鏡を入れて腫瘍の有無、大腸粘膜の変化を調べる）

※早期発見に役立つ有用な方法として、バーチャルコロノスコーピーが近々導入されることが期待。大腸を3D-CTで写し出し、内視鏡の役割を画像が果たす

胃がん

- バリウム検査（造影剤のバリウムを飲み、胃の粘膜の変化をX線撮影で調べる）
- 内視鏡検査（胃カメラとも。口から内視鏡を入れて胃の粘膜の変化を調べる）

※最近の内視鏡は検査とともに切除もできる検査・治療一体型のもので多く、たとえば胃がんの場合、2センチ以下の早期がんは内視鏡手術で治療

肺がん

- CT検査（体を輪切りにするようにX線撮影ができる）

※肺がんの早期発見に成果を上げているのはヘリカルCTによる検診。立体的な画像が得られることで、これまではむすしかった微細な変化も見つけることができるようになった

乳がん

- マンモグラフィ（乳がん用に開発されたX線撮影装置）
- 細胞診（針を刺して組織を採取し異常を確認する）
- 生検（組織を切除して異常を確認する）

子宮頸部がん

- 子宮頸部細胞診（子宮頸部の組織をこすりとり、異常細胞の有無を調べる）
- コルポスコープ（膣拡大鏡）、組織を採取して調べる

子宮体部がん

- 子宮体部細胞診（子宮の奥をこすりとり、異常細胞の有無を調べる）
- 子宮内膜を採取して、組織の異常の有無を調べる

前立腺がん

- 直腸診
- PSA（前立腺特異抗原＝がんの場合に増える）というたんぱく質の値を調べる

※PSAのような役割を果たすものを腫瘍マーカーと呼んでいる

立体的な画像を得る）で写し出し、内視鏡の役割を画像が果たすものです。内視鏡が不要なので、患者さんも楽で、異物が見つかれば、すぐに内視鏡を入れて組織の採取や処置も行なえます。早期発見に役立つ有用

な方法として、近々導入されることが期待されています。

胃がん

バリウム検査（造影剤のバリウムを飲み、胃の粘膜の変化をX線撮影で調べる）、内視鏡検査

（胃カメラとも。口から内視鏡を入れて胃の粘膜の変化を調べる）などが行なわれます。鼻から入る細い内視鏡も開発されて、検査時の負担がずいぶん軽くなっています。

最近の内視鏡は検査とともに

切除もできる検査・治療一体型のものが多く、たとえば胃がんの場合、2センチ以下の早期がんは内視鏡手術で治療されます。また、高周波の電流を流して切除するITナイフを備えた内視鏡も活躍しています。

X線写真の陰影から発見されることもありませんが、CT検査（体を輪切りにするようにX線撮影ができる）を行なうことで、より早く異常を見つけることができます。

ちなみに肺がんが見つかるのは、その三分の一が①症状を自覚した（せきや血痰、胸が痛いなど）とき、三分の一が②CT検査などで見つかりますが、残りの三分の一は、③ほかの病気の際に行なったCT検査の画像からたまたま見つかる、というものです。

CTの検査機器の導入が進み、日本では飽和状態のきらいがありますが、撮影機会が多いおかげで肺がんが見つかる例のように、功の面もあるのです。

肺がんの早期発見に今、成果を上げているのはヘリカルCTによる検査です。3D-CTの仲間、スパイラルCTとも呼ばれるもので、立体的な画像

が得られることで、これまではむずかしかった微細な変化も見つけることができるようになりました。

乳がん

マンモグラフィ（乳がん用が開発されたX線撮影装置）による検査で、しこりをつくる前の早期の乳がんの発見ができるようになりました。

マンモグラフィ検査は、乳房を検査台の上に乗せ、パネル装置で上から軽く押さえて乳房内をよく写せるようにし、上下左右、四枚のX線撮影を行なうものです。

乳がんはマンモグラフィと超音波検査、場合によってはMRI検査を行なうことで診断ができます。細胞診（針を刺して組織を採取し異常を確認する）や生検組織を切除して異常を確認する）も行なわれることがあります。

子宮頸部がん

子宮頸部がんは、子宮の入り口近くにできるがんです。子宮頸部細胞診（子宮頸部の組織をこすりとり、異常細胞の有無を調べ）を行ない、さらによく調べるためにコロスコピー（拡大大鏡を用いることや、組織を採取して調べることも行なわれます）

子宮体部がん

子宮内膜からできるがんです。子宮体部細胞診（子宮の奥をこすりとり、異常細胞の有無を調べる）や、子宮内膜を採取して、組織の異常の有無を調べます。

前立腺がん

先述の直腸診を行なうと、前立腺のがんも発見することができま

最近、早期発見に活用されているのが血液中のPSA（前立腺特異抗原）がんの場合に増える）という特別なたんぱく質の値を調べる方法です。

前立腺がんとPSAの関係のように、がんと相関する成分が

わかれれば、早期発見に役立てることができま

国立がんセンターの研究所では、見つかりにくい膵臓がんをはじめ、各種のがんの腫瘍マーカーについての研究を行なっていますが、残念ながら、まだ実用化されるまでにはありません。

また、一般的に腫瘍マーカーにあたる成分の数値が上昇したときは、がんが進行している状態です。早期がんの段階から異常を知らせてくれる、本来の腫瘍マーカーとしての役目を果たすものは、PSA以外にまだありません。その意味で、PSAは画期的な存在です。

ただし、PSAは前立腺肥大の場合にも上昇することがあり、また、進行するのがきわめて遅い前立腺がんもあるので、PSA値が異常であればすぐに手術を、という考えについては議論のあるところです。

今後は、早期に発見された前立

腺がんについて、進行が早くてすぐに手術を必要とするものかどうかを見分けることができる研究を進める必要があるでしょう。

がん検診は 一年に一回受けるのが 原則

国立がんセンターのがん検診メニューにも入っていますが、一時もてはやされたものにPET（ペット）陽電子放射線断層撮影装置）があります。

PETは、がんが再発したり、転移したときの微細な病巣を発見するのに優れている面があり、見つけにくい臓器がんがPETで見つかった例もあります。ただ残念ながら、当初に期待されていたほど、PETで早期がんを見つけることはできません。これからも、その臓器の特性に合った早期発見法の開発が待たれています。

なお、がん検診は一年に一回受けるのが原則です。

大腸がんや肺がんは、ゆっくり育つというのがわかってきたので、大腸の内視鏡検査や肺のCT検査は二〜三年に一回でも良いのではないかとも言われています。ただし、実証するデータが必ずしも揃っていませんので、一年に一回がん検診を、というのが合言葉としてはふさわしいでしょう。